

森林組合の経営改善に関する一考察

○松本 美香(高知大)

背景と目的

森林組合は、我が国の林業政策において、地域の森林資源管理の中心的担い手として位置付けられてきたが、その経営基盤の強化もまた課題としてあり続けてきた。しかし、近年の森林組合統計によると、平成30年度から令和4年度の間、事業損益の赤字計上組合数は134組合から80組合に大きく減少し、事業利益の計上額は72.9億円から135.3億円へ増加、1組合当たりの事業利益額は1008万円から2125万円へと大きく上昇してきている。部門別に見れば、主軸の森林整備部門(利用他)および販売部門(販売他、林産事業)が伸びを見せている。統計数値上は、森林組合の経営は順調に改善しているようであるが、現場からは経営の厳しさに苦しむ声が多く聴かれる。森林組合の経営の実態はどのような状況にあるのだろうか。

本研究では、四国内の規模や事業構成の異なる5組合の森林組合を対象に、森林組合の経営の実態およびそれぞれの収益確保の仕組みについて整理することを目的とした。

調査方法

2023年6月～2024年5月にかけて、5組合の組合長、参事、専務、事業担当責任者等に聞き取り調査を行った。5組合の選出については、県の普及指導担当の助言を受けつつ、事業規模および事業構成が出来るだけ異なるように配慮した。5組合のうち4組合からは総代会資料もしくは事業概要資料の提供を頂いたほか、可能な範囲で事業関係資料の提供も頂いた。

結果と考察

調査対象組合の事業規模は、事業総利益で3千万円から2億円を超える規模まで幅広く、職員数(作業班員含む)についても10名程度から70名を超える規模まで多様であった。主軸とする事業は、多くが森林整備部門および販売部門であったが、その収益性(部門別の事業利益/事業総収益で算出)については森林整備部門で2%～14%、販売部門で-21%～9%と違いが見られた。また、森林経営事業を行う組合においても大きな差(-135%～42%)があった。これらの違いを形成する要因としては、事業対象地域の地形(主に傾斜や山襲)や森林資源の状況(樹種の構成比の違い、樹齢の違いなど)といった素材生産の生産性に影響するものがまず挙げられていたが、組合経営の基本的な方針(小規模経営、大規模経営)の違いや、森林整備事業から林産事業への移行段階の程度の違い、素材生産の流通・販売の選択幅の違いなどの影響も大きいとの意見があった。また、造林補助事業への依存が高いほど経営の安定性を損ねるという認識が概ね共通しており、補助事業の仕組みが森林組合の経営の安定性に及ぼす影響の高さがうかがえたとともに、経営の安定性を求めるために補助事業以外の事業展開や組織構造の見直しなどに取り組む必要に迫られていることがわかった。

(連絡先：松本 美香 matsumoto-mika@kochi-u.ac.jp)

ハローワーク求人票にみる林業労賃・賃金制

三木敦朗（信大農）

林業従事者の労賃・賃金制については、全体としては低賃金であること、しかし高性能林業機械のオペレーターについては高い水準でも求人されていること、日給制・出来高制がひろくみとめられること、が事例調査などから一般に知られている。

労賃・賃金制については統計調査が存在する。労賃については全国農業会議所「農作業料金・農業労賃に関する調査」が、造林と伐出それぞれについて地方ブロックごとと、地帯（都市近郊か、農山漁村か）ごとに集計している。源泉徴収票などに基づいており信頼できるものであるが、代表値であるという制約がある。賃金制については、「森林組合統計」が都道府県別に、造林事業とそれ以外の事業に分けて集計している。これは調査対象が、調査の性質上、森林組合に限定される。

これらの統計調査では、熟練・未熟練の別や資格の有無、作業種別、年齢別の労賃水準の差異を確かめることができない。また、森林組合以外の林業事業体の賃金制度の分布も不明である。

そこで本研究では、ハローワークの求人票から林業労賃・賃金制の全体像を明らかにできないかと考えた。ハローワークインターネットサービスの求人情報検索で情報を取得し、分析した。求人情報の収集期間は、2023年11月7日～2024年5月8日である。シルクスクリプト社の「ハローワーク求人情報取得ソフト」を用い、産業中分類「林業」の求人情報を蒐集した。

もちろん、ハローワークの情報にも制約が存在する。一つは、これは求人の際の事業者側からの提示金額であり、実際に就職に至ったものではない点である。また、仮に熟練労働者の事業者間移動が、相対交渉（ヘッドハンティングなど）を通じておこなれているとすると、ハローワークの求人情報は未熟練労働者に偏る可能性がある。これは既存の統計調査と合わせて検証するほかない。

情報の収集期間のあいだにおこなわれた一般求人の総求件数は 2,162 件（再募集含む）であった。このうち、月給 886、日給・日給月給 1,193、時給 81、出来高給 2 で、55.2% を日給制が占めた。「育林業」での求人では月給 355、日給 451、時給 22 であり、「素材生産業」での求人では月給 182、日給 207、時給 30 であった。日給制はそれぞれ 54.5%、49.4% を占め、若干の差があるが、「育林業」にも素材生産に関する求人がみられる点には注意を要する。森林組合では月給 118、日給 153（56.3%）、時給 1、それ以外の事業者では月給 768、日給 986（49.9%）、時給 219、出来高 2 であり、森林組合において日給制がより多くを占める傾向がみられる。なお、国有林の森林管理署が求人しているものも若干みられ、月給は皆無で、日給 54（88.5%）、時給 7 である。

Local Community Perception Toward Mangrove Ecosystem Services and Tourism Development in Borneo

○ Rizky Arif Nugroho (The University of Tokyo)

Introduction

Mangrove ecosystems provide local services and global benefits like carbon sequestration but are highly threatened. Scientific research aims to conserve, protect and manage mangroves, using global mapping and ecological valuation to raise awareness. Indonesia, which has the largest mangrove area, lost 430,000 ha from 1985 to 2019. This paper studies Balikpapan Bay, where deforestation has disrupted regeneration. Mangroves support the new capital's ecosystem services and support local economies through tourism and timber but face over-exploitation risks. They aid fisheries and protect against natural hazards. Awareness of mangrove ecosystem services and tourism varies with proximity, occupation, and education. Understanding ecosystem services is crucial for protection. Local awareness influences management strategies. This study examines if local institutions like conservation centres improve awareness, which is essential for planning tourism and conservation efforts.

Methodology

The questionnaire had three sections: socio-demographic characteristics (age, occupation, gender, education, residency length), perceptions of mangrove ecosystem services, and tourism development, using a 5-point Likert scale. Spearman's correlation test examined the relationship between socio-demographic factors and awareness, and results were compared across areas using Kruskal-Wallis Analysis.

Results and Discussion

The study sites showed a high awareness of mangrove ecosystem services, influenced by socio-economic factors. Most respondents visited mangroves for fishing, hiking, or scenery, benefiting economically. Awareness was linked to occupations like entrepreneurs, government employees, retirees (Indicator 1), and merchants (Indicator 2). Older and long-term residents were more aware of declining mangrove populations (Indicators 2 and 5). Mangrove centres had less influence compared to long-term residency.

Kruskal-Wallis Analysis found significant results for Indicators 1, 5, and 9. Graha Indah Mangrove Center shaped perceptions of conservation, education, and tourism. Long-term residents (72%) recognized tourism development would improve facilities and property values. Of the 100 respondents, 85% owned property, enhancing their awareness of tourism's impact.

References

- 1) Arifanti, V. B. (2020). Mangrove management and climate change: A review in Indonesia. IOP Conference Series: Earth and Environmental Science, 487(1), 012022. <https://doi.org/10.1088/1755-1315/487/1/012022>
- 2) Daryono, B. S., Sarosa, W., Ubaidillah, R., Widyatmoko, D., Purnomo, D. W., Djohan, T. S., Hadisusanto, S., Aipassa, M. I., & Setyawati, T. (2022). PEMBANGUNAN BERKELANJUTAN DI IBU KOTA NEGARA NUSANTARA PERSPEKTIF BIOLOGI (1st ed.). Gadjah Mada University Press.
- 3) Friess, D. A. (2023). Global mangrove mapping has gone mainstream. Science Bulletin, 68(19), 2145-2147. <https://doi.org/10.1016/j.scib.2023.08.012>
- 4) Huxham, M., Dencer-Brown, A., Diele, K., Kathiresan, K., Nagelkerken, I., & Wanjiru, C. (2017). Mangroves and People: Local Ecosystem Services in a Changing Climate. In V. H. Rivera-Monroy, S. Y. Lee, E. Kristensen, & R. R. Twilley (Eds.), Mangrove Ecosystems: A Global Biogeographic Perspective (pp. 245-274). Springer International Publishing. https://doi.org/10.1007/978-3-319-62206-4_8
- 5) Jordan, A., & Russel, D. (2014). Embedding the Concept of Ecosystem Services? The Utilisation of Ecological Knowledge in Different Policy Venues. *Environment and Planning C: Government and Policy*, 32(2), 192-207. <https://doi.org/10.1068/c3202ed>

Contact: arifrizky@g.ecc.u-tokyo.ac.jp